

バトン

ひいおばあちゃんからバトン

5年 S・Sくん

僕には認知症のひいおばあちゃんがいた。僕が会いに行くよ、とても喜んでくれたが、僕が何回行っても僕の名前を覚えてくれないし、似たような話をしていった。認知症について母から聞いていたので、仕方がないと思っていたが、正直悲しかった。

そのひいおばあちゃんは、昨年の冬、亡くなってしまった。お葬式の時、ひいおばあちゃんが燃やされてしまうことを初めて知り、ひいおばあちゃんの全てが消えてしまうのではないかと、急に怖くなり僕は泣き出してしまった。そんな僕に対して母は

「ひいおばあちゃんは死んでしまったけれど、お母さんの中でも、Sの中でも生き続けるから大丈夫だよ。」

と言った。僕はその時、母の言っていることが、よくわからなかった。

その数日後、母は僕のお宮参りの時の写真を見せてくれた。そして僕に「Sが着ているこの着物は、ひいおばあちゃんがお父さんの為に思いを込めて選んだ着物を譲り受けたんだよ。だからお母さんはとても大事にしたいと思っているの。ひいおばあちゃんの思いがお母さんに引き継がれて、今もその思いが、お母さんの中で生きているんだよ。」と話してくれた。

僕は認知症になったひいおばあちゃんしか記憶がないけど、僕のことを考え、僕の為に着物を準備していたことを初めて知り心がなだかほかほか温かくなつて、ひいおばあちゃんが僕の心の中に入ってきてくれていたみたいだった。そして僕は、母が言っていた死んでも誰かの心の中で生き続けるという意味を理解できた気がした。

バトンの中で、柳さんの桐の木に対する思いや、おばあちゃんが娘に心を込めて作った木目込み人形への思いを知ったとき、僕はひいおばあちゃんから譲り受けた着物のことを思い出した。これが僕にとって大事なバトンなのだ。ひいおばあちゃんから父と母へ、そして、僕に渡されたバトンを、今度は僕が精一杯走って渡す番だ。バトンが続いていく限り、ひいおばあちゃんが、僕たちの中で生き続けてくれるだろう。